

視覚と身体による表現の一考察

曾 和 光 代

はじめに

何げなく過ごしている生活の中で近頃関心させられるのが広告物である。見すごしてしまいそうなものから斬新なもの、ユーモラスなもの等々、街角、ビルの壁面、プラットホーム、歩道に埋め込まれているもの、雑誌、新聞、テレビのコマーシャル等、『見て下さい。』と言わんばかりに得意げな表現をしている。日常生活の中に自然に入り込んで人々の生活の中に寄生し、共存しているのに気がつかない。飽きるほどの広告の量であるが、適当に排除し印象に残るものは吸収してゆく。印象に残る広告物がどれであるのかは個人の思考や興味によって残るもの残らないものが違ってくるが、どんな広告物にしても、それを作成した人が熱を入れて、『これなら人の心をひく』、『制作者側の意向が伝わるものではないか』と考えた思案が広告物の中に凝縮されている。大半の広告物は視覚効果をねらってつくられている。言語を介せず正確にイメージを視覚化しなければならない。そのために、制作者にとって必要なものは、発想、思想、意図、経験、等の器量が豊かであればならない。

広告物は日常生活の中にしらずしらず入ってくる視覚効果をねらった表現方法である。

その他、絵画、彫刻等の美術分野でも同じことがいえる。制作者の思案が一つの作品の中に凝縮されて表現されていると考えられる。表現方法はちがってくるが、音楽や舞踊の分野でも同じ事がいえる。音楽では、作曲者、演奏者、歌唱者のそれぞれの思案が曲を通じて自己表現されていると思われ、舞踊においても創作者のイメージを具体的に身体で表現してゆく。

つまり、誰もが自己のもっている思案をどのような形で他の者へ伝達し認め

てもらうかという自己を高め改発してゆく自己表現とも考えられる。自己を表現してゆくための手段として色々あるが、絵画であれ、彫刻であれ、音楽、身体表現であれ、その表現したい底に流れるものは同じである。どのような形にすれば相手に伝わり自己も満足してゆくかに通じると考えられる。

自己表現を可能にし高めてゆくために一見ジャンルが違う視覚表現（美術）と身体表現（舞踊）の融合を試みて自己表現の可能性を引っぱりだしてみることにした。

以下1994年8月のワークショップの結果に基づいて述べてゆく。

I ワークショップ要項

舞踊と美術の融合を求め、視覚表現と身体表現との共通テーマをもうけお互いに刺激し合うことにより独自の視覚表現、身体表現を可能にしてゆこうという試みである。試みの研究会は以下の通りの目的、内容である。

1. テーマ：「視覚と身体による表現のクリエイティブワークショップ」
——舞踊と美術の融合を求めて——
2. 目的：ジャンルが違う舞踊と美術の共通のテーマをもうけ、お互いに刺激しあうことによって独自の視覚・身体表現の可能性を発見し、それを発展させる。
3. 会場：神戸親和女子大学学生会階3階ホール他。
4. 開講日：1994年8月2日～4日の3日間
5. 時間：午前10時30分～午後4時30分
6. 講師：☆ブライアン・ファルコンブリッジロンドン大学
ゴールドスミス・カレッジ
(芸術学部助教授)
☆宇都宮 千佳
アカデミー・オブ・パフォーミング・アーツ
〔ミュージカル・ディレクター、振付家〕

富山大学非常勤講師

☆佐藤 恵子

通訳兼助手

ブライアン氏の師弟，現在オランダにて彫刻の勉強中

7. 内容とテーマ

- 1日目** : 10:30~12:00 レクチャー
(スライド)
12:00~12:30 ムーブメント (導入)
14:00~15:00 即興ムーブメント
15:00~16:30 ドローイング
(モデルをつかって)
- 2日目** : 10:30~11:30 ムーブメント
(テーマ Weight and gravity)
11:30~12:30 コラージュ
(テーマ Weight and gravity)
14:00~15:30 ムーブメント
(テーマ penetration 空間を突き抜ける感じ)
15:30~16:30 コラージュ
(テーマ penetration 空間を突き抜ける感じ)
- 3日目** : 10:30~12:30 コラージュ
ムーブメント
(テーマ距離間)
13:30~15:30 グループインスタレーション
グループダンス
15:30~16:30 反省・ディスカッション

8. 受講者：女性26名 年齢 (10歳~50歳)

教員，学生，主婦

以上の主旨で実施した。

講師は美術関係者として、ブライアン氏、舞踊関係としてミュージカルでのダンス振付をされている宇都宮千佳氏の御両人をお招きして行った。宇都宮氏がロンドン大学ラバンセンターで舞踊を学んでおられた時に、ロンドンを中心に舞踊活動をし活躍されていた。その折、彫刻家でもあるブライアン氏と知り合われ、美術と舞踊の二つを融合させる研究を初められた。ジャンルが違う美術と舞踊の間に共通のテーマを設けた表現方法の研究は国内を初めイギリスでも珍しい試みである。日本では金沢市で初めてワークショップを持たれている。今回本学で開かれたものもそれと同じもので、お互いを刺激し合ってより良いものを作りだしてゆこうというものである。この考え方に深く共鳴しこの研究会を実施するに至った。詳しい内容は以下の通りである。

Ⅱワークショップの内容と解説

1日目（前半）

〔レクチャー〕：ブライアン氏による講義

スライドをもとにデッサン、絵画、彫刻等の映像を見ながら作品の流れ、強調している点、写真的なものから抽象的なものへと発展してゆく段階、過程を学ぶ。作品を見ながら点・線・面・量・空間等について解説を聞く。何を強調して描いているか。又描きたいかによって線の方向も空間とのバランスも違ってくる。基本的にはシンプルに自分の印象を形にすることが大切である。常に“Simple is best.”を強調される。この“Simple is best.”の精神を基本にして次へと進んでゆく。素人にもわかるように解説されたが、後に具体的な表現活動に入り、よりその意味がわかる。

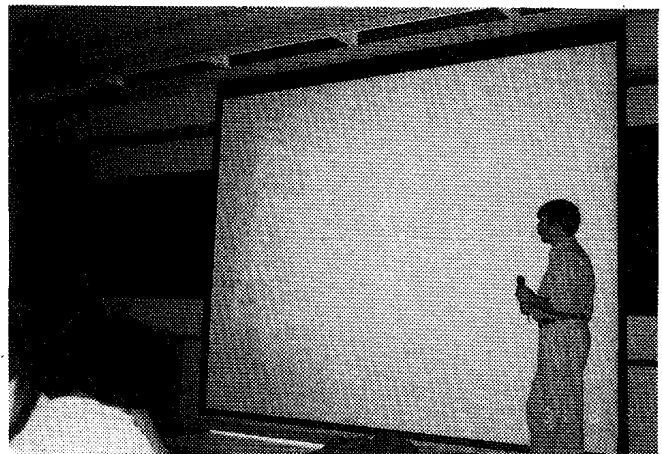


写真1 ブライアン氏の講義

1日目（後半）

〔ムーブメント〕：テーマ「重量を感じて」

—導入—

①仰臥姿勢で指，手のひら，手首，肘，膝，腰等をだんだんと動かしてゆき大きな身体への動きへと移行してゆく。——（小さな動きから大きな動きへの移行）

②自分の中指を見つめながら右手の中指から左手の中指へと視線が移り，その手が他の人の手に渡り徐々にグループ全体の動きへと変ってゆく。次に視線が移行してゆくと動きが始まり他の人の足の指にも移行してゆき全体が身体にとまったホテルでも見つけたように視線が移行し動きが始まる。——（視線を感じて動きへと発展）

——相手の重量を感じて——

①二人組になり

◎お互いに力をかけ合う。

◎一人が力をかける，もう一人は重力を感じて，それを受けとめる。

◎二人で押す側と受ける側を色々な面から行う。背中，腰，腹，臀部（尻），股，足腕，手等

◎お互いに体重を感じながら崩れてゆく。

この重と量についてはドローイングしてゆく。



写真2 相手の重量を感じて

〔ドローイング〕

：テーマ「重・量」

木炭で二ツ切りの画用紙にモデルをつかってデッサンしてゆく。モデルは受講者が交代し合っている。モデルは二人，お互いに体重を感じ合えるポーズを二人で考える。

描くためのポイントとしては，

①一個の塊りとして描く。

②重力や相手の体重を感じて描く。

③描きたい空間、面、線、接触面等を良く観察し自分の描きたい部分を思うままシンプルに描いてゆく。

これらのことに気を付けながら作業に入る。結

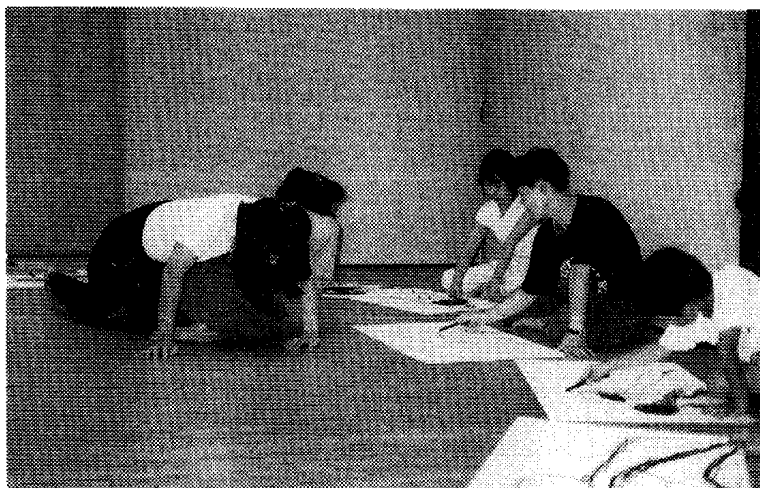


写真3 ドローイング

果どの作品も素朴に一個の塊として捕えられていた。この段階では重量感をテーマにしているので、どの作品もズッシリとした重みを感じることが大切で、木炭で描かれた絵も重みのある一個の塊として見る事ができた。視覚、身体共に重量感あふれる表現ができたように思われる。

次に少し質と量にせまり、一人のモデルを他の者が押したり、つついたりしてみる。時には強く、時には弱くやさしく、モデルは触れられた部分を感じ、感じた部分を動きへともってゆく。それが、だんだんと全身の動きへと変化してゆき身体全体が動き始める。押される力の強さによって動きの質も違ってゆく事もわかる。

2日目(前半)

[ムーブメント] : テーマ「重量」

さらに重と量について進めてゆく。

①二人一組になりお互いに接面をつくり体重をかけてゆく。次に重量を徐々に次の場所へとかけながら移行してゆく。

②全員で大きなサークルを作り人から人へ重量をうつしながらサークル移動をしてゆく。体育の授業等でやる馬跳びのようにどんと相手の接面を求めて体重をかけてゆきながら移動してゆく。その人のどの部分に接面をもち自分の体重をかけてゆくかは個人の自由である。できるだけ相手に重量感を与える事がポイントである。

③三人一組になり，初めAがポーズをとる。そこへBが重量をかけながらポーズをとる。AはBのポーズを崩さないようにそっとぬける。CはAのぬけた空間も考えながらBに重量をかけてゆく。次はBがぬける。といったように順ぐりやってゆくが，時には崩れてしまうこともある。

重量感のある一つの塊が重量を感じながら移行し動きの変化さらに形の変化へと質を高めてゆく。

〔コラージュ〕：テーマ「重・量」

次にこれらの身体表現を二ツ切りの画用紙に黒く塗った新聞を手でちぎって描いてゆく。三人一組となり，二人がモデルとなり一人が描く。

この時のポイントとしては。

- ①重量感を感じさせるもの。
- ②線の流れてゆく方向。
- ③色のコントラスト（新聞紙の塗りむら等の利用の仕方）
- ④モデルとモデルの間にできた空間
- ⑤一つの塊としてみてゆく見方は変わらない

以上のことに気をくばりながらシンプルかつ大胆に描いてゆく。

全員の作品を舞台の壁に貼ってみると，どの作品も生きづいている感じがするのが不思議である。ただたんにモデルを見て画用紙上に表現してゆくのではなく，描き手自身もモデルとして身体表現をしているので，描き上った作品の

塊の中に生きを感じずにはいられない。身体で表現したものが画面上でも生かされている。

2日目（後半）

〔ムーブメント〕：
テーマ「空間を突きぬける」

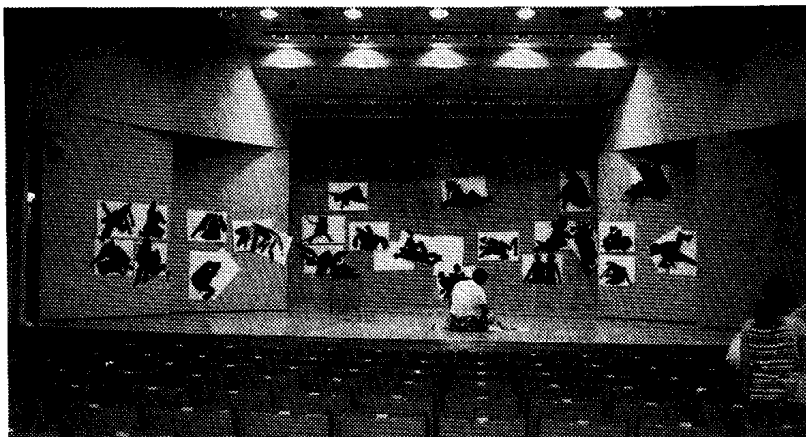


写真4 舞台の壁に貼られた，コラージュ

- ①舞台の外へ飛び出す感じで動く。
- ②三人が一つの塊りになった姿勢から一人が引っぱられていくように飛び出してゆく。
- ③ゴムに引っぱられて弾んで飛んでゆくように一人目が引っぱられて弾んで飛んでゆき、二人目もつれられて飛んでゆく。三人目も同じく弾んで舞台の外へと飛んでゆく。

時には弾力でもどってきたり、又弾んで飛んでいったりをくり返しながらか空間を突きぬけて飛び出してゆくことを身体で表現してゆく。

- ④舞台から飛び出した後は客席や通路を使ってどんとどんと歩く。合図があれば「よける」「かくれる」「かまえる」等のポーズをとりながら空間をどんとどんと突き進んでゆく。(空間と時間と速度の関係)

- ⑤次に客席と通路だけでなく飛び出してきた舞台もつかってホール全体にみんなが散らばり、この人と決めた相手に視線を浴びせる。決めた相手を目で追いつながらどんとどんと移行してゆく。視線によって空間でのつながりを感じさせる。相手にもそれが伝わり視線を感じてもらうまで一生懸命に視線を浴びせる。決して手を振ったりして合図を送らない。

(空間で視線を感じて動く)

- ⑥客席をつかって、^{つた}蔦がのびてゆくように、次の客席へ、次の客席へと移行してつるの先が空間を突きぬけてゆく様子をグループで身体表現してゆく。時には他の人を乗り越えて又、下を潜り抜けて突き進んでゆく。

- ⑦三人グループでどんとどんと突き進んで伸びてゆこうとするが、他のものに邪魔されて伸びてゆこうとする先を変えられてしまう。それでもどんとどんと他の方向へも突きぬけて進んでゆく。

以上の事を空間意識をもちながら突き進んでゆく表現を身体で行った。これらを受けて、画面に同じテーマで描いてゆく。

〔コラージュ〕：テーマ「空間を突き抜ける感じ」

描くポイントとしては、

- ①力強く大胆に、画面を突き抜けても良いから、空間を突き抜けて飛び出して

ゆく感じをだす。

②向っている方向

③色のコントラスト

④モデルとモデルの間にできた空間

⑤シンプルに描く

午前中と同じく描いてゆくためのポイントに気をつけながら始めてゆく。

三人のモデルをつかって、一人が一個の塊りから突き抜けるように引っぱってゆく。二人目三人目と引っぱられるようにして一つの空間から外へほうりだされるように、突き抜ける感じをモデルをつかって、二ツ切りの画用紙の上に黒く塗った新聞を手でちぎって貼りつけてゆく。モデルはどんどん交代してゆく。身体表現をする事とそれをみて画面上に表面してゆく事と両方受講者は体験する。

これらの作品も舞台の壁面に貼りつけてみると一つ一つの作品が生かされ、全体を通して見てゆくと、どの作品も動きがでてくる。作品を並べてゆくことによりダイナミックに次から次へ突き抜けて移行してゆく流れが見られるのが不思議である。

身体表現してきた事を画面上でも表現していったのであるが、どちらも体験することにより、よりテーマに添った表現が可能となったのではないかと考えられる。

3日目(前半)

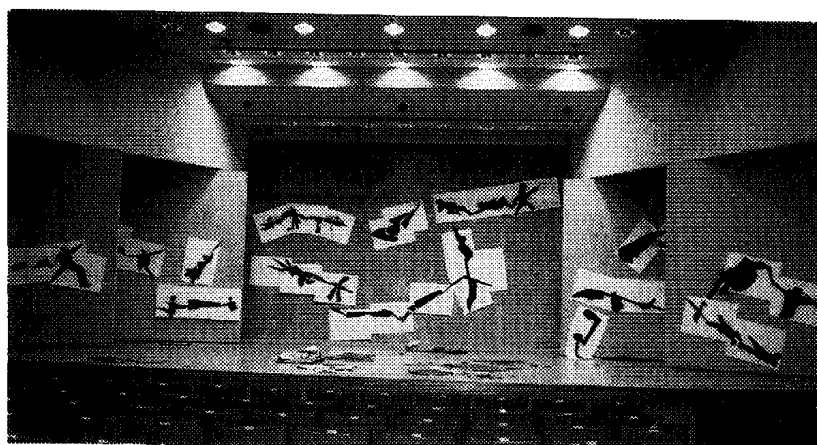


写真5 コラージュ「空間を突き抜ける感じ」

二日間で学んだ事を次へどう発展させてつなげてゆくかが課題である。

二人ないし三人での接面、接点を求めて、重量感のある表現。又、空間を突き

抜けるような表現。お互いの Working によってどんどんと描象的な塊りができてくる。それに距離感（空間を感じさせる）を加えて、モチーフをつなげてゆくと動きへと発展してゆく。

新聞紙を使ってのコラージュ，この表現の中でも同じテーマでやってゆくうちにより表現の域が広がってゆく。

最終日の前半はホール全体を使ってダイナミックな動きへと発展させてゆく。

空間を利用して，押す——引く，広がる——集まる。はきだす——すいよせる。というような対比を利用して，重量感，押し寄せてくる威圧を感じながらどんどん空間を突き抜けてゆく。又，一点に吸い寄せられるように，ある空間に集中して寄ってくる。等，日常生活の中でもみられる拡散——集合といった表現へと発展させてゆく。

〔コラージュとムーブメント〕

テーマ「距離間」

コラージュでは今までの画用紙上の描き方ではなくホール全体を使って黒い新聞紙と白い画用紙を利用し表現してゆく。コラージュとムーブメントは同時に表現してゆく。

①新聞紙と画用紙の利用効果を教わる。

②各自手に黒く塗った新聞紙を何枚か持つ。舞台サイドの壁が回転式になっているので，風車のように回し，その回転を利用して，水車から水が飛び出すように舞台へ一人一人飛び出してゆく。

③どんどん飛び散ったものが舞台いっぱいひろがってゆく。海の水が満ちてくるように。

④ひろがった水はどんどんと流れ広がってゆく。

ホールいっぱいの空間を

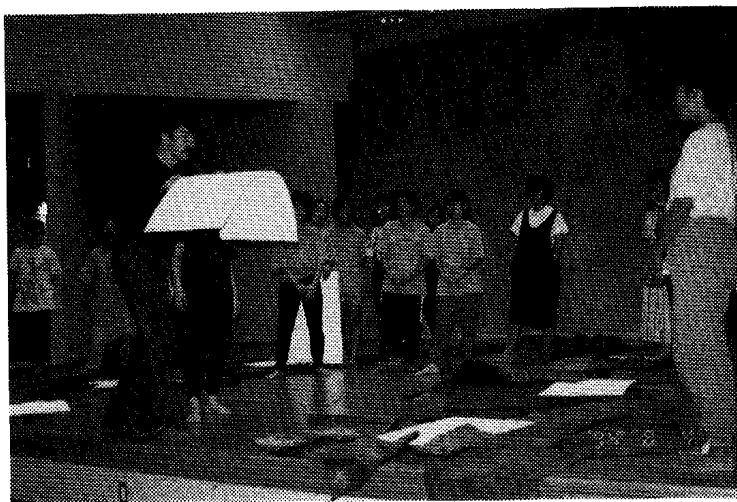


写真6 新聞紙と画用紙の利用効果を考える

使って客席も乗り越えて水が満ちてゆく様を身体と手に持った新聞紙を利用して大きく表現してゆく。一人の動きから他の人とのからみも考えながらホールいっばいに拡散してゆく。

⑤通り過ぎた跡に一つの物が残る。海に浮ぶ海藻であったり、一本の流木であることもある。その表現は手にした新聞紙を床面や客席に残して空間をどんどん突き進んでゆく。

⑥ホールいっばいに広がるだけ広がってゆく。

海でたとえば満潮ということになる。

⑦満潮が過ぎれば次に引き潮がやってくる。広がっていたものが逆に何かに吸い寄せられるように引いてゆく。その時、何か持ち去ってゆくもの、残してゆくものがある。例えば、大きな石や砂をえぐるように波が運んでゆくかと思えば波が引いた後に海藻や貝がらが残っていることもある。このような様子も新聞紙を利用して表現してゆく。引き寄せられる場所は出発点でもある舞台へともどる。

⑧引きよせられたものは大きな塊となってまとまりをもってゆく。それは舞台の中心部に大きな岩のような塊となってまとまっているようにもみえる。

⑨ホールの座席には何かが立ち去った後のように新聞紙の跡が残る。

ホール全体を使っての新聞紙と画用紙を利用したのアートはなかなか興味あるものである。描く所は別に画用紙やキャンパス上だけでなくどんな所でも表

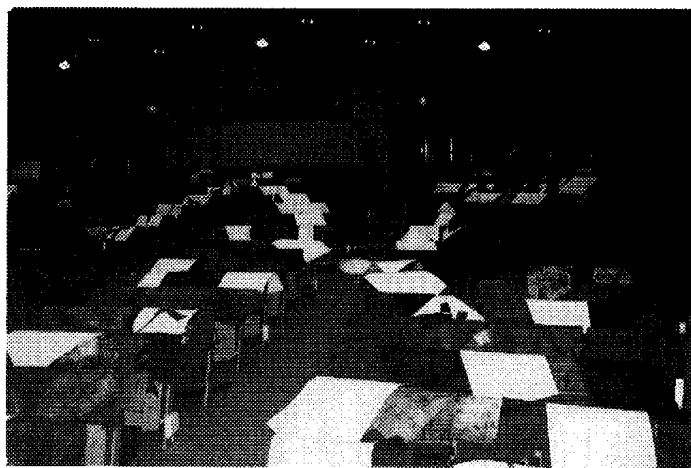


写真7 座席をつかった新聞紙の配置

現できる。表現活動の多様性に感心させられる。

3日目(後半)

[グループインスタレーション・グループダンス]

午前中の動きをさらに深めて『海の干満』を身体と新聞紙を利用して表現してゆく。

①舞台わきの回転壁から、そ

れぞれ新聞紙を持って飛びだして舞台に広がる。

②広がったものはあふれるように客席の方まで満ちてゆく。

③満ちてゆく水はどんどんとホールいっぱいになり満ち広がってゆく。

④ホールいっぱいになり満ちあふれんばかりの水は何かにより吸いよせられるように引いてゆく。

⑤出発地点である舞台に引き寄せられてゆく。この時各自持っていた新聞紙を客席に残してゆく。又、客席にある物を持ちさりながら引き寄せられてゆくもの。表現の仕方は個人の表現力にまかされる。

⑥どんどんと舞台に吸い寄せられるように引いてゆき、そして舞台中央に集まってゆく。

⑦手に持っている新聞紙や舞台に残された新聞紙で身体を隠すように全員が接点を求めて集ってゆく。

⑧舞台には黒い岩の塊が残る。

⑨客席全体には何かを通り過ぎたかのように軌跡があり、それ自身がホールいっぱいになり描かれたアートになっているのが不思議である。白と黒のコントラストである流れをつくっている。

⑩次に効果音楽を流し、表現してゆく。音の効果によりそこに表現者自身の叙情が高まり動きは一層なめらかになってゆく。

以上を何度かくり返し作品を仕上げてゆく。

〔反省・ディスカッション〕

ビデオテープを映しながら表現していった様子をフィードバックしながらディスカッションする。でてきた意見として、

- 「表現活動」によって、自分自身の体で何かを覚えられた。感じることもできた。
- 常識的なダンス、描画からの打開という点がおもしろい。発想がおもしろい。
- 単純な動きだったが、そこに流れがあった。
- ダンスの視野が広がった。
- 物の見方が変わった。

- 素人でもすぐに理解することができた。
- 子どもの様に楽しんだ。
- テーマが決まっていたが、時間があれば表現者自身がテーマを決めてやってみたい。
- 効果音ももっと考えてみたい。

等であったが、受講者自身は次への希望がでるなどして、意欲的にとり組めた。

ブライアン氏の美術に対する発想のおもしろさ、自由に空間を利用し従来のダンスの概念にとらわれず表現してゆこうとする宇都宮氏が一緒になって、視覚表現も、身体表現もシンプルに表現されていて且つ訴えるものがある。年齢も幅広く受講できるのが良い。

このワークショップで受講生一人一人が、自分自身の体で何か感じることができ、ダンスに対する視野、美術に対する視野の広がりを持ち柔軟でユニークな発想展開が出来ることを、自己表現の一つとして身につけることができたのではないか。

Ⅲ 舞踊と美術の創作活動における基本的な共通点

舞踊と美術を融合させてゆく上で創作物を描いてゆくポイントとなる共通点について実施したムーブメントとコラージュ、美術の講義内容から基本的な事柄を順をおって考察してゆくと以下の通りになる。

1. 点・線・面

点といえば小さな“ポツン”とした円を思い浮かべる。最少限の面積や体積をもうけて空間に位置指定する。造型においても点と空間との間のさまざまな展開によってあるから造型の諸々の要素はすべて点から出発している。舞踊においてもその地点から舞い始めるのか、出発点は必要であり、最終的にポーズをとる地点も必要となる。小さな円と点ではないが図式で舞っている動きを点と線でしめせば出発点は小さな円である。

点が一定の方向に移動した軌跡を線とよんでいる。点から点への移動で多くの線を作る。そこに方向や動きが表れる。創作物を描いてゆく骨格である。線が移動したり、線に囲まれるとそこに面ができる。面は彫刻の場合や、創作ダンスの群踊のような場合、特定の方向からしか見る価値のないものや、閉鎖状態におくような空間の使い方をする構成は避けて、できるだけ多くの方向に耐えうる空間構成の採用が望まれる。床の間を背にした置物や、舞台装置のように一方向にだけ、価値のあるのはさけたほうが良いように思われる。

2. 量

面がある角度をもって空間に移動する時、そこに立体的空間ができる。つまり面に包まれたのが量である。量は立体をなす。立体は一つの方角から見て、その型が決定されるものではない。量の必要な彫刻等の場合、どの方角から見ても鑑賞に耐えうるものでなくてはならないというだけでなく、あらゆる方角から追求されていなくてはならない。舞踊の場合は、客席側からすれば一方向からしか見えないが創作してゆく場合決して〈量〉を考えないで振り付けることはゆるされない。どの方角からみても、表現したいものが身体で表現されていないと観者にこちらの思いが伝わってゆかない。群踊になると量塊は迫力を感じさせる。客席から見える者だけがしっかり踊っておけば良いという問題ではない。充実した量のある作品は見る物に感動を与える。

3. 空間・時間・速度

最近公園等でみられる現代美術作品は従来の地面への接面があってどっしりとした彫刻から宇宙空間を突きぬけるかのように、あらゆる方角に伸びてゆく可能性をもっている作品、どの空間から見ても同じ型の作品、作品の中心部を空間にして、その空間も作品の一部になっている作品、地面との接点が少ない作品等々、美術作品に空間とのバランスのとり方の考えが変ってきている。舞踊においても従来の舞台だけでの公演から舞台空間を飛び出して客席やホールを利用しての公演があり観者もその創作者の思案の中にとり込まれている。演者と観客との心の接点を考えに入れての作品である。

動きを静止させそこに定着させてしまうのであれば、作品と空間のバランス

だけを考えれば良いのであるが、空間を突きぬけて移動するとなると速度と時間の関係はずすことができない。舞踊の場合移動が必要となってくるので空間・時間・速度の使い方によって表現したいイメージが変わってくる。美術の場合も造型の空間における転位も時間と速度につながってくる重要なポイントとされているようで、スポーツカーや新幹線の車体等の型はより速く空間を突きぬけて移動してゆくのに適した型となり、これらも作品の一つと考えるならば、造型芸術における時間や速度の参加は、現代美術に一つの革命をもたらしつつあるともいわれているらしい。

4. 集合体に関する考え方

今回のワークショップのコレクションにおいて身体表現したものを一つの塊として描いていった。この一つ一つの作品を集合させてつないでゆき全体を見ると作品は生きつき、動いているかのように見える。単体を集合させることによって作品に一つの流れが見えた。今日の造型においても、一つ一つの単体を集合させたり拡散させたりすることにより何ものかが生まれるという考えらしく集合と拡散ということが行なわれ表現されている。この集合と拡散の対比をつかって海の干潮と満潮の身体表現を全員で創作していった。このような対比作用が日常生活の中にもある事に気づき、小さな単体の中から大きな社会へと集合し、又、単体へともどってゆく。集合しては拡散してゆく拡散して又、違った単体とかかわりながら集合してゆく。人間社会の生活の中でくり返しおこっている現象である。

一人で表現できないものが一人一人寄り合い集合してゆくことによって表現可能になってゆく。単体では一本の棒であっても何本かが集合して、それぞれが色々な方向へ突きぬけるように表現されていることで何ものかが生まれてくることもある。

5. 抽象と具象

彫刻を造る場合、その作品が抽象的であるとか具象的であるかという問題にかかわらず対象の相似性にだけ、その価値を求めてはならない。対象物から何ものかをぬきだすような操作を行うべきである。ただ単に対象の表層を撫でる

行為よりも、そのもののどの部分を強調させて描きたいか抽出することにより、直接的に生命や生活につなげるヴァイタルな要素を導き出すことになる。抽象・具象の如何を問わず形式の問題を先行させることは間違いである。舞踊においても同じことが言える。過去の形式にとらわれずに創作者のイメージにそって身体表現してゆくべきである。そこには思想や感情、社会に対する認識や願望、そしてより深い生の根源をえぐる問題意識がなければならない。それが観者と演者との交感を呼びさますのである。

以上5項目について共通点がみいだされたように考えられる。

IV 舞踊と美術の融合の結果とまとめ

いまや身体表現の一つである舞踊の世界も伝統的な技術的概念から脱し、自由に創作者の思いを身体で表現することが可能である。美術の場合も彫刻の世界等においては、粘土、木、石等と材質にとらわれることなく、使い古して捨てられた鉄くずをよみがえらせることも可能である。作者が、その作品に思案を入れて発表した瞬間に説得力のある生き物となる。身体でもって表現してゆく、舞踊においても、伝統的な芸術は伝えてゆかなければならないであろうが、少なくとも創作ダンスにおいては創作者の思いを伝統的な舞踊形式、技術にとらわれることなく表現すべきである。どんなに技術的な実力を高めても、それだけでは魅力的な作品にはならない。優れた作品には、それを描いた作者のものの見方や人間性がぶっかけられているのである。どちらの作品も見ると感動と生きづきを感じさせる作品でなければならない。表現する手段は違っていても作者が持っているイメージが決まれば、身体表現でまずポーズ、動きを考えてみる。これをコラージュやデッサンして画面上に描き変えてみる。両者の表現ポイントとしては以下の通りである。

- 1) 形式や見た目を考えずに思いをシンプルかつダイナミックに表現してゆく。
- 2) 自分自身が何を表現したいのか目的をはっきりとさせる。
- 3) 構成を考える。

4) 空間の表現も大切に、立体的な空間を思いきって描く、空間の意識を持つ。

これらを気をつけて実際に画面に描いてみると具体化され、目で見えていた時と違ったおもしろさを発見する。例えば空間と量塊の構成がみえてくる。この両者を融合させることによって創作者の空間意識が高まってくる。描こうとするものはもちろんの事であるが、その他の空間についての配慮もでてくる。量感、質感共に高まり生命感のあふれる作品となってゆくことにより、自己表現の質も高まってゆく。自己表現の質が高まってゆくと、より創作者の思案が作品に組み込まれてゆくので、みる者に感動を与える結果となる。

おわりに

今回のワークショップでは高度な舞踊の域まで達してはいないが、舞踊の基本を学んだのではないか。高度なダンスステップや舞台装置がなくても描きたいものは身体で表現することができる。美術に関しても、原点に返れたような気がする。身近な道具や材料で、あるものを表現してゆける。両者共、表現してゆきたいものはどんどんと自己の思案にもとづいてアピールしてゆき、それが生活の中に生きづき生命力へとつながってゆけばよい。出き上った作品の好き嫌いは個人の思考によって違ってくるが、創作者が命を吹き込んだ作品には訴えるものがある。

表現方法は異なっているが自分自身の思案を形にしてゆく点では通じるものがあり、分野別に物事を考えるのではなく自由で視野の広い物の見方をしてゆきたいものである。

舞踊と美術を融合させて表現活動をする中で視野の広い物の見方、考え方が身についていったように思われる。この分野に限らず他の分野でも同じ事が言えるのではないか。視野を広げてトータル的に物事を見てゆけばホリスティックな考え方、見方が必要なのかもしれない。

なおこのワークショップで受講者の方々の視野が広がり、形にとらわれないトータル的な物の見方ができた事を講師の先生方に感謝させていただきたい。

参考文献

1. 「舞踊学原理」—創造的芸術的経験—
M. N. ドウブラー 著
松本 千代栄 訳
大修館書店
1974年2月1日 初版発行

2. 「モダンダンスのシステム」
V. プレストン 著
松本 千代栄 訳
大修館書店
1976年12月10日 初版発行

3. 「ダンス学習法」
R. L. マレイ 著
松本 千代栄, 佐藤 康子 訳
大修館書店
1974年3月15日 初版発行

4. 「舞踊美学」——舞踊美の本質——
小林 信次著
逍遙書院
1967年10月31日 6版発行

5. 「表現・ダンス学習指導の体系化をめざして」
——幼稚園から高校までの学習内容を考える——
西谷怜子・荒木恵美子・磯島紘子・井上邦江・藤原文江 共著
遊戯社
1986年4月25日 初版発行

6. 「身体表現」——からだ・感じて・生きる——
柴 真理子
東京書籍
1993年4月6日第1刷発行

7. 「彫刻をつくる」

——基礎造型・塑造・鋳型・彫造・集合——

建島覚造・佐藤中良・尾川宏

舟越保武・植木 茂・井上武吉

美術出版社

1993年10月10日 第24刷

8. 「構成デッサン」

アトリエ出版編集

婦人画報社

1994年4月10日 初版発行

9. 「デザイナーのためのカンパ表現」

今井 寛

アトリエ出版社

1992年9月5日 第4刷発行